

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00493

研究課題名(和文) ベル・エポック期における文学・美術思潮からみた映画の位相と影響に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study of the Phase and Influence of Cinema on the Literary and Artistic Trends of the Belle Epoque Period

研究代表者

伊勢 晃 (ISE, AKIRA)

同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：00379059

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ベル・エポック期の映画とその言説を視野に入れながら、フランスにおける「エスプリ・ヌーヴォー」の諸相とその影響を実証的に明らかにすることである。当時の映画状況に関するデータベースを作成し、文学・美術思潮と関連付けながら、新しい芸術潮流が形成される過程を明確にすると同時に、この時代精神の日本文化への影響についても研究を推進した。コロナ禍の影響により、現地調査の一部と最終年度の研究者招聘、シンポジウムが不可能となったが、現地研究者の協力によりデータベースはほぼ完成し、基礎的資料の整備を終えた。今後は、当時の映画とバレエの影響という観点を新たに導入し、本研究をより精密なものにしたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特色は、研究基盤が整備されているとは言えないベル・エポック期という時代を対象にしている点にある。ベル・エポック期は象徴主義とシュルレアリスムをつなぐ過渡期と見なされており、新しく生成する文学・芸術の運動原理については十分に研究されているとは言えない状況にある。本研究は、この研究の空白を補うものであり、ベル・エポック期の映画に関する基礎的資料を整備することにより、映画研究やその日本文学・芸術との比較文学・芸術研究の分野に寄与することに学術的・社会的な意義があると言える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the various aspects of "Esprit Nouveau" and its influence in France, taking into account the cinema and its discourse during the Belle Epoque period. We have created a database on the state of cinema at that time, and by relating it to literary and artistic trends, we have clarified the process of the formation of new artistic trends, and promoted research on the influence of the spirit of this period on Japanese culture. Due to the effects of the Corona disaster, it was impossible to conduct part of the field survey, invite researchers and hold a symposium, but with the cooperation of local researchers, the database was almost completed and the basic materials were prepared. However, with the cooperation of local researchers, the database is almost complete and the basic materials have been prepared. In the future, we would like to introduce a new perspective on the influence of film and ballet at that time to make this research more precise.

研究分野：アポリネールと20世紀前衛芸術研究

キーワード：アポリネール ベル・エポック エスプリ・ヌーヴォー 美術思潮

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、ベル・エポック期の映画とその言説を視野に入れながら、フランスにおける「エスプリ・ヌーヴォー」の諸相とその影響を実証的に明らかにすることである。

ベル・エポック期フランスではリュミエール兄弟によって映画が誕生し、このメディアはリアリズムとの強い結びつきを持ったが、すぐにメリエスによってその性格を変え、アンチ・リアリズムの美学追求が始まっている。映画は新しい芸術としての地位を獲得し、例えばアンドレ・バザンの映画理論やレオポール・シュルヴァージュの「色彩のリズム」のような、特に「同時性」や「イメージ」といった観点からの、抽象的理論化が行われる。

研究代表者の伊勢は、これまでアポリネールを中心軸にしなが、ベル・エポック期における文学、美術誌や新聞の活動実態を調査し、当時の前衛芸術の展開と変容などを研究してきたが、新興芸術である映画のこのような変容と発展は、文学者や芸術家の関係や新しい文学・芸術潮流の展開を反映しており、両者の影響関係に関する学術的検証は不可欠であるという認識に至った。映画はその後も諸芸術と寄り添いつつも独自の発展をとげ、映画史の様々な時期を経験するが、ベル・エポック期に構築された映画産業と文学・芸術との関係のあり方が、映画の美学、美学的探求の根本に関わっているのではないかと考えられる。

これまでの研究を継承、発展させ、当時の文学・美術思潮と映画産業との相関関係を、対象とする時代を広げ、日本への影響を視野にいれて精査することにより、前衛芸術研究で不十分な部分を補完することが可能であり、本研究分野における新しい視点を獲得できると考え、新しい芸術潮流が形成される過程を明確にするための基礎研究を、日仏の研究者で行うことにした。

2. 研究の目的

本研究の目的はベル・エポック期の文学・芸術思潮に関する研究を、同時代の映画産業を対象を拡大し、研究の射程を20世紀全体にまで拡張することで、フランスにおける「エスプリ・ヌーヴォー」の諸相とその後への連続性と変化について実証的に解明することである。本研究では当時の前衛文学・芸術との関係、活動の展開と内容の変容および社会事象や日本を含む諸外国の新しい文学・芸術運動の影響を手がかりにして、映画の位相のとらえ直しを試み、日本への影響も含めたフランス前衛芸術の新たな一面を明確にする。具体的には、これまでに知られることのない映画作品、無名の作家や芸術家も含めた映画評論や映画批評などに関するデータベースを作成し、基礎的資料を整備すること、当時の映画における美学や詩学が、いかにベル・エポック期の文芸・芸術思潮に大きく関わっているのか、また日本の芸術文化全般についてどのような影響を与えているのかについて、具体的事例を検討、考察することにより証明することが最終的な目標である。

本研究は、海外の研究者の協力により、これまで確認されてこなかった資料の発見、提示にも貢献でき、ベル・エポック期の文学・芸術思潮に関する基礎的資料を整備するとともに、映画研究やその日本文学・芸術との比較文学・芸術研究の分野に寄与することに学術的・社会的な意義があると言える。

3. 研究の方法

当時の映画作品に関する諸言説を直接の研究対象とし、最初に、製作者、それに関わる評論およびその執筆者、掲載誌に関するデータベースを作成し、国内外の研究環境を整備する。このデータベースは、文学誌、美術誌のデータベースと照合し、関連付けることにより、当時のフランスにおける芸術文化状況に関する情報を網羅した基礎的資料となる。次に、発表された映画作品の分析と本データベースの解析を行うことで、映画産業の変化と、文学・芸術思潮の変化を比較対象とする。当時の時代精神である「エスプリ・ヌーヴォー」の諸相の解明という最終的な目標に向けて、本研究はフランスの研究者の協力をえて、最新の研究動向を把握しながら研究を進める。3年間の研究期間を1年ごとに区切り、短期的計画を立てた。

- (1) 研究環境の整備：当時の映画や文学・芸術に関する文献調査・収集とデータベースの作成を行う。
- (2) 先行研究調査：先行研究の比較検討とデータの整備を実施する。
- (3) 分析：収集した文献、データベースの分析作業を行う。
- (4) フランスの研究者との連携：フランスから研究者を招き、講演会やシンポジウムを企画・開催する。

4. 研究成果

上述のとおり、本研究は、ベル・エポック期の映画とその言説を視野に入れながら、フランスにおける「エスプリ・ヌーヴォー」の諸相とその影響を実証的に明らかにすることを目的としている。

研究基盤を確立するために、国内外において文献調査・収集を行い、当時の映画作品と製作者、それに関わる評論およびその執筆者、掲載誌に関するデータベースの作成を行った。本データバ

ースを用いながら、文学誌、美術誌のデータベースと照合し、関連付ける作業を行い、当時のフランスにおける芸術文化状況に関する情報の分析を進めている。

フランスの研究者を招聘し、公開講演会や研究会を開催することにより、社会への還元を行った。具体的には、来日中であった、パリ第3大学教授ロラン・ヴェレ氏とギユスターヴ・エッフエル大学准教授キャロル・オルエ氏を2018年12月に同志社大学に招聘し、当時の映画に関する専門的知識の提供とジャック・ブレヴェールと日本に関する講演会を開催した。またパリ＝ナンテール大学教授ロランス・カンパ氏を2019年10月にフランスから招聘し、第一次大戦時の文学状況についての講演会やゼミナールを開催し、専門的知識の提供を受けた。

順調に研究を進めていたが、2019年度末から始まったコロナ禍の影響により、予定していた最終データの解析およびフランスの研究協力者2名の招聘とシンポジウム、成果の発表が行えず、本稿執筆時点ではまだ作業を継続している状態である。このような状況ではあるが、研究代表者が在外研究で最終年度後半からフランスに滞在することになったため、新たな資料を収集する機会を得ることができ、これまでに構築したデータの整備を行うとともに、現地の研究者から資料や専門的知識の提供を受けることが可能となったため、今まで行ってきた研究のなかで不十分であった点を確認するとともに、新しい視点を獲得することにつながった。海外の第一線で活躍する研究者と緊密な連携体制をとり最新の知見を取り入れることで国内外の研究環境を整備することができたと考える。

今後は、本研究課題を完遂し、シンポジウムや論文という形で発表するとともに、2021年度科学研究費補助金「20世紀初頭の芸術思潮からみたバレエと映画の位相と影響関係に関する総合的研究」(基盤研究(C) 課題番号:21K00446,研究代表者:伊勢晃)に引き継ぎ、フランス映画史におけるバレエの影響という観点を新たに導入することにより、本研究成果をより精密なものにする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 SALAGNON Benjamin	4. 巻 15
2. 論文標題 Reception et traduction de la litterature japonaise en France : la place singuliere de Murakami Haruki.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 表象と文化	6. 最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤洋司	4. 巻 765
2. 論文標題 秘密、手紙、剥き出しの生 ペドロ・コスタの初期作品について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 212-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SALAGNON Benjamin	4. 巻 17
2. 論文標題 Etude de cas : les traductions francaise et americaine de l'incipit de Kaeru kun, Tokyo; wo sukuu de Murakami Haruki	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表象と文化	6. 最初と最後の頁 69-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 伊藤洋司
2. 発表標題 ベルクソン、ドゥルーズ、イメージ
3. 学会等名 国際シンポジウム『イメージと権力、あるいはメディアの織物 ～日仏の眼差し～』（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Arouet (Carole), Simon-Oikawa (Marianne), Allain (Patrice), Perrigault (Laurence), Ise (Akira), Carree (Roland), Veray (Laurent), Pastre (Beatrice de), Herpe (Noel), Martin (Serge), Thumerel (Fabrice), Marcoin (Francis), Keit (Alain), Lebrat (Christian), Versavel (Dominique)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Classiques Garnier	5. 総ページ数 356
3. 書名 Jacques Prevert, detonations poetiques	

1. 著者名 渡邊浩司, 金沢百枝, 増山暁子, 横山安由美, 村山いくみ, 狩野晃一, 白木和美, 林邦彦, 多ヶ谷有子, 貝塚泰幸, 玉川明日美, 松原文, ナタリア・ペトロフスカイア, 近藤まりあ, 伊藤洋司, 篠田知和基	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 484
3. 書名 アーサー王伝説研究	

1. 著者名 早坂七緒, 岩本剛, 伊藤洋司, 小林正幸, 新田孝行, 森岡実穂	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 200
3. 書名 芸術のリノベーション オペラ・文学・映画	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊藤 洋司 (ITO YOJI) (10384728)	中央大学・経済学部・教授 (32641)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	バンジャマン サラニョン (SALAGNON BENJAMIN) (00739360)	大阪大学・マルチリンガル教育センター・特任准教授（常勤） (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関